

五輪塔資料の研究・日本仏典平安期編

齋藤彦松

一、序 平安期の東、台日本密教典に五輪塔資料が続出して来ると、この国に五輪塔が建立されて来る。鎌倉、室町期と次第に増加し、日本全土に展開し、日本人の多くがその下に死後を托して永眠している。世界に仏教国は少なくないのに、日本国土にのみ広く展開発展した事は、日本人とその国土に、五輪塔の持つ思想と形と、それから来る情感が適合したものと推定される。本論は平安期（八世紀より十二世紀）四百年間に成立をみた日本仏典での五輪塔資料を、集録、整理、研究し日本五輪塔史の初期を解明せんとするものである。

二、研究位置 此の研究は、印度バラモン資料である

①「五輪塔成因の研究」(S. P. No. 56)。②「五輪塔資料の研究・仏教経軌編」(S. P. No. 53)に続くもので、大陸での五輪塔資料が日本に流入してより平安期、即ち日本五輪塔成立期の資料研究である。

三、平安期資料での五輪塔の名称 仏教軌での名称は、善無畏の訳語で「率都婆」「曼荼羅五輪」「法界輪」。不

空では「五輪塔」がある。平安期東密資料では、空海の「率観婆」。空海又は宗叡とされる、ロ「毗盧遮那法界率都婆」、ハ「法界率都婆」。十二世紀の覚鑊資料では、ニ「五輪率都婆」となつて居り、台密資料では安然の、ホ「率観波」、ヘ「五輪率都婆塔」。覚超には、ト「器界五輪形像」。長宴の「四十帖決」になると、チ「五輪法界塔」、リ「法界縁起塔」、ヌ「五輪法界塔」、ル「五輪塔」がある。五輪塔なる名称は、経軌資料の不空訳に初出をみるが、日本では十一世紀頃には五輪塔とも呼ばれた事が推定される。長宴は同書に (S. P. No. 53) 貴重な五輪塔図を遺している。

四、平安期資料での五輪塔の形式 長宴は前記五輪塔図に傍記している。

「師曰。無所不至名率都婆者。五輪相累故也。謂塔以五輪成也」

率都婆と名ずくるは、五輪相かさなるが故也と記している。即ち率都婆と云ふは図の如く方形の上に円を、その上に三

角、半月、宝珠形と順次相累ねた形と云ふ事になる。是は経軌資料に記録されている五輪塔と同様であるが、平安期資料の中には、特殊形式の問題もあるので是を摘出してみよう。

①、空輪の形式 空輪は経軌資料にも定形がない。平安期資料での空輪の形を列記すると、東密、台密、次の如くなる。

東密 1 団円 2 円形 3 雜形 4 宝形
台密 1 円 2 一点 3 無定形 4 方円角月種々具足 5

金剛形 6 一切形(円)

右の如く平安期資料で定形はみられない。右の内、経軌資料に見られなかった空輪形としては、東密では雜形と宝形があり、台密では、一点、方円角月種々具足、金剛形、一切形がみられる。右の内、宝形は宝珠形、一切形は円と推定される。他は具体形を見出せない、総じて平安期資料では、団円、団形、円、一切形等何れも是等は円形と推定される事は見逃せない。平安期及鎌倉期頭初に建立された、立体五輪塔の多くに円形空輪が見られる。此の事は、仏典資料と建立塔との関連を示唆しているものと解される。

②、風輪形 風輪形は、経軌、平安両資料共に、その形は「半月」とされている。唯一点、台密僧安然は、その撰「真言宗教時義」(大正 75 p. 374)で「蓮華形」としている。蓮花は蕾時(未敷蓮花)及花瓣の一葉のみを見ると宝珠形とな

るが、開花時(開敷蓮花)は、真上から見ると大要円形となり、側面は大要「半月形」となる。安然の「蓮華形」は、半月形を蓮花に形容し美化表現したものと推定される。鎌倉初期と推定される石塔の風輪が、開蓮花となっているものもある事は注意される。

五、平安期の五輪塔観 五輪塔観の基本は、塔の内容、形式共に古代インドバラモンの哲学思想と祭式に発する故、バラモン資料と仏経軌資料のそれを継承し、それに日本平安期密教の特色を加味した形となっている。

①、バラモン資料に拠る五大観の要旨

五大(地水火風空)
→ 地 → 世界 → 五大
→ 火 → 三火 → 五火
祭火所 (方円三角半月六角)

②、仏教経軌資料の五輪塔観要旨

摩訶薩 (五輪塔) { 方円三角半月団 } 大日如来
地 水 火 風 空

③、平安期の五輪塔観要旨

五輪 { 方円三角半月団 } 大 普照法界
ト輪 { 角月円 }
ハ塔 { 地水火風空 } 日 衆生離苦得樂

大要右の如くなるが、①②③に一貫して系流している主要

宗教思想は 五輪塔（五大）＝大日如来（梵）となり 梵 Brahman → 大日 Maha Vairocana に置換えられている事は、五輪塔理解の重要点となる。⑧平安期になると、この五輪塔に「普照法界 衆生離苦得楽」（安然「金剛界大法対受記」大正 75 p. 136）の宗教思想が加味対応されて来る。是は日本の五輪への進転と理解される。

バラモン教ウパニシャッドでは、五大を器世間（物質界）としている事は既に述べた如く、五輪塔成立起点であり、当然仏経軌資料も、平安期資料も之を継承している。伝空海とされる「秘蔵記」（大正図一）に「草木非情も五大所成故に成仏」とし、「秘密曼荼羅十住心論」（大正 77 p. 303）に「五万物の因」との意を記し、空海又は淳祐の撰「守護経念誦次第」（GA 密金 4-756）に「五輪以つて器界成立」とある。平安密教では五大所成が成仏の因となっている。この事は平安期のみならず、日本の五輪塔観を理解する重要拠点と考えられる。

五輪物質観は、五輪人身観へと転進する。経軌資料では既に「五輪投地礼」なる語が多くみられ、又五輪の各部を五輪に対応せしめている。平安期資料でも「秘蔵記」に「観五大於身中」を始め、種々の人脈と五輪塔の対応がみられ「五輪投地礼」は通常語になっている。

台密資料では、覚超は「胎蔵三密抄」（大正 75 p. 561）で、

安然「撰定事業灌頂具足支分」（大正 75 p. 213）の文を承けて「以一切世界皆是五輪之所依持」と記して居り、「三密抄料簡」（大正 75 p. 633）では「五大具表万法也」としている。

一切世界、万法の基点に五輪（大）を置いている。

東密僧覚鑑は、その著「率都婆十種秘釈」と

秘蔵抄 { 諸仏諸聖 人界器界 } 法莊制多（大功徳聚）

五輪秘蔵抄 { 悉皆淨土 諸仏土 金仏教 五部諸尊影 秘藏万法 一切形体 }

要略右の如く述べている。五輪塔観は次第に信仰面へと展開して行く。五輪ソトバは、仏浄土を含むとの信仰は、次の時代の五輪塔観に大きく影響して行く。多くの人の墓塔へと進転して行く基盤となる信仰思想が、此の期に形成を見る事は重要である。

六、六大 地水火風空の五大と識大とを以って六大と

する考え方は、バラモン資料での器世間 Dhātuloka の分類である五大と、有情 Sattva を一妻としている事に類似する。有情は生命に重点があり、識 Vijñāna は心に重点がある。仏教典では早くも阿含經典に「六大」を記述している。「四諦経」「楽想経」等の初期經典を始め、般若、智度論、婆沙論等の多くの大乘經論にみられる。平安期仏典では、空海の

「即身成仏義」に「謂六大者五大及識」と述べている。以降の日本密典では、六大思想を現代に迄系統をみている。この六大思想は、五輪塔表現にも影響して来る。

七、五大皆響あり

この考え方の源流は、既にウパニシャツド（アムリタナーダ Amrita nada up）に、五音量と五大が説かれている。（S. P. No. 56 第三表 No. 18）平安資料に於ては、空海の「声字実相義」（大正 77 p. 401）に「五大悉く響を具し、一切の音声は五大を離れず。五大即是声之本体」と記し同「念持真言理観啓白文」では「五大有響 十界具言」としている。此の思想は、音声の総ては、人身を含む器界にその根本因を求めた事に拠るものであろうか。此の思想は、安然、覚鑊等に引継がれて行く。

八、日本五輪塔史の初期を語る率都婆鈴

日本での五輪塔は、いつ建立されたのであろうか。この事は五輪塔史上の重要点の一つとなっている。（S. P. No. 53）「五輪塔資料研究・仏教経軌編」第五章（五輪塔の成立）では、三股塔、五股塔、多宝塔と共に「五輪塔」なる名称で、舍利容器として大陸に既に存在していた事が推定される。日本で三国伝来と伝承する白銅製「率都婆鈴」が現存し、その頂上には率都婆即ち五輪塔が載っている。其他日本に現存する率都婆鈴は鎌倉期頃迄の物は総て五輪塔が載って居り、吉野期以降と推定される物には、五輪塔以外に多宝塔又は三重塔等が載って来

る。率都婆鈴資料を時代整理すると

①、醍醐寺蔵白銅製率都婆鈴（宝物第十号）頂上の五輪塔は、火輪三角四面体で古式な塔形を為し、鈴の底辺は花瓣形となっている。寺伝は三国伝来。

②、円行請来目錄率都婆鈴一 洛北靈巖寺円行（A. D. 799～865）の「靈巖寺和尚請来法門道具等目錄」（大正 55 p. 10, 73）に「率都婆鈴一」の記載あり。平安の初期に大陸より率都婆鈴の請来が存した事が知られる。帰朝は承和六年（A. D. 839）。③、安祥寺資材帖率都婆鈴一口 京都山科安祥寺恵運（A. D. 789～869）は入唐し、承和十四年（A. D. 842）に帰朝。その請来物の中に「率梵婆鈴一口」（心覚「入唐記」に拠る）があり、恵運の勘録になる「安祥寺資材帖」にも阿闍梨附法物として「率都婆鈴一口」がある。前記請来物の鈴の事と推定される。この記録も九世紀前半の請来が推定される。

④、不灌鈴等記の率覩婆鈴 撰者親寂親王（A. D. 886～927）が記録した率覩婆鈴を含む鈴杵義を記した項は「円城寺僧正口決云」（大正 78 p. 65）と記されている。京都東山に存した円城寺の僧正益信（A. D. 827～906）は広沢流の元祖で本覚大師と勅諡され、宗叡より密灌を受けたとされる。その益信口決の率覩婆鈴は、九世紀後半には、日本に鈴上の五輪塔が建立されていた事を語っているものと推定される。（終）

（梵字資料研究所所長）